セネガル初等教育における情操教育の検討
―ローカライズされた持続可能な授業への転換―

学籍番号 09MD0064　鎌谷 雅美

【研究の目的と方法】

本論文は、セネガル初等教育における情操教育が、その国に適した形で具現化され、現地教員が実践かつ持続可能な授業案と授業方法を検討することを目的とする。ここでいう持続可能とは、現地教員がその必要性を認識し、初等教育のカリキュラムに取り込み、それが定着した状態のことを指している。

セネガルの初等教育では、1979 年に施行された教育勅令が現在にいたるまで適用され、日本と同じように算数や国語、理科、社会などの主要教科と音楽、図工、体育などの副教科がカリキュラムに組み込まれている。しかし、勅令の内容と実際の教育現場の状況には大きな隔たりがあり、様々な要因から副教科の授業はほとんど行われていない。この状況下で、2002 年より JICA 青年海外協力隊（以下、協力隊員と記載）の派遣が始まった。現地の小学校で音楽、図工、体育の授業を通して「情操教育を普及させること」を目的とし、今日までその活動は継続されているが、情操教育の実施率の低さが指摘されている。その理由として、財源不足にともなう教員のストライキや教材不足といった、同国初等教育の根本的な課題と関連するものが多くあげられる。しかし、同国の情操教育は植民地時代にフランスから持ち込まれたものであり、現在日本が行っている支援もローカライズされたものとは言えない。定着しない原因のひとつは、こうしたカリキュラムの中身に問題があるのではないかと考えたことが初発の問いである。ここでいう「ローカライズ」とは、セネガルの社会的背景を踏まえ、現地教育者が主体となって情操教育の必要性を議論し、授業方法を検討することである。このように、フランスや日本など外部の人々によって推進されてきた側面があることを踏まえ、セネガルに適した情操教育とはどうあるべきなのかを考察し、一つの方向性を見出すことを本論の追及課題に位置付けた。

研究方法は、文献調査と質問紙調査である。文献調査では植民地時代にセネガルの宗主国であったフランスのエクサンプロヴァンスにある海外関係公文書館(Archives Nationales d'Outre-Mer)に赴き、セネガルがフランスの植民地であった 1900 年代初期の初等教育に関する資料を収集した。また、フランスと日本の情操教育についての先行文献から、国ごとに異なる情操教育の位置づけや教育的効果を明らかにし、情操教育の定義とその役割を確認した。質問紙調査では、筆者がセネガルで情操教育の支援を行っていた 2006 年に現地教育者にインフォーマル・インタビュー、2008 年に初等教員養成学校の研修生らに対して行ったアンケート、さらに 2012 年現在派遣中の協力隊員に対しアンケートを実施した。これらの調査から、セネガル初等教育の情操教育における主流な展開の一例として、現状と課題を読み取った。

【論文の構成】

第１章　はじめに
第１節　研究の動機
第２節　問題の所在
第３節　研究の目的と方法
第４節　本論の構成
第２章　初等教育における情操教育の取り組み―日本とフランスを一例として
第１節　情操とは何か
第２節　日本の情操教育
第１項　情操教育の成り立ち
第２項　現在の情操教育とその取り組み
第３節　フランスの情操教育
第１項　初等教育の教育制度
第２項　フランスの情操教育
第４節　本論における情操教育の定義と取り扱う教科
第３章　セネガルの概要およびセネガル初等教育をとりまく変遷と現状
第１節　セネガルの概要
第１項　自然環境と社会・経済状況
第２項　保健・医療状況
第２節　植民地時代の教育政策と教育制度
第３節　現在の教育政策と初等教育の就学動向
第１項　教育政策とドナー支援動向
第２項　教育制度
第３項　初等教育の就学動向
第４項　初等教育ならびに情操教育の現状
第４章　セネガル初等教育の情操教育をめぐる現状と持続可能な支援―青年海外協力隊の事例研究および現地教育者へのアンケート調査より
第１節　教育現場における情操教育の現状
第１項　セネガル人教育者の情操教育に対する意識
第２項　協力隊員による教育現場レポート
第２節　情操教育マニュアルの成果と課題
第１項　情操教育マニュアルの作成と現状
第２項　マニュアルの活用実態と課題―協力隊員、JICA への質問紙調査より―
第３節　情操教育の課題
第４節　協力隊員の事例からみえる情操教育支援の必要性とその取り組みの提案
第５章　考察
第１節　セネガル初等教育が抱える問題点
第２節　持続可能な情操教育への一考察
第６章　結論
第１節　セネガル初等教育における持続可能な情操教育の可能性
第２節　課題と今後の展望

【論文の概要】

第 1 章では研究の動機、問題の所在、研究の目的と方法、ならびに本論の構成を記述した。特に研究の動機では、セネガル初等教育における情操教育の普及において、筆者が実務家として関わっていた当時を自省的に振り返り、研究目的を設定するまでの経緯を記している。研究の目的と方法については前述のとおりである。

第 2 章では、本論のテーマである、初等教育における情操教育を定義した。しかし、セネガルの近代教育は植民地時代に旧宗主国フランスから持ち込まれたため、フランスにおける初等教育の取り組みから、セネガルの初等教育を間接的に整理した。さらに、これまでセネガルの情操教育を 10 年にわたり支援している日本の教育も取り上げ、学校教育における情操教育の役割や必要性を示した。二カ国を取り上げたことで、各国の情操教育における共通点と相違点が明らかとなった。また一方で日本の情操教育の歴史を概観し、その役割は時代と共に変化してきたことが読み取れた。

第 3 章では、セネガル初等教育の変遷と現状を確認した。セネガルがフランスの植民地であった 1900 年代初めの仏語文献からは、統治の都合上、フランスが教育政策に力点を置いていたことや、語学の習熟度の低さなど現在と同じ課題を抱えていたことが明らかになった。フランスによってもたらされた近代教育は、セネガル独立以降も様々な面で影響を与えている。セネガル初等教育の現状については、教育政策や教育制度、就学動向等をとおして整理した。この中で特に指摘されたことは、伸び悩んでいた初等教育の就学率向上に重点的に取り組んだ結果、数値は大幅に向上した一方で、質の低い教員の増加が問題視されるようになった。現在は教育の質の向上が重点課題に挙げられている。

第 4 章では、現地教育者や初等教員養成校の研修生に対して実施したインフォーマル・インタビューから、現地教育者らの情操教育に対する具体的な意見の一例として回答を取り上げた。次に、セネガルの小学校で活動する現役協力隊員に対して行ったアンケート結果の事例からは、教育現場に情操教育が定着しておらず、主要教科に比べて優先順位が低いことが示された。もしくは、必要性を認識していても、現地教員が自主的に情操教育を行うことには困難を伴う状況が確認された。さらに、歴代の協力隊員が作成し、後にセネガル教育省とのマニュアル策定作業を経て認定された情操教育マニュアルについては、マニュアルがあっても活用されていない、カリキュラムに組み込まれないといった意見が挙げられた。その普及においても、教育省から具体的な取り組みは報告されていない状況が明らかになった。

第 5 章では、これまでの調査結果を踏まえ、内容を考察した。情操教育が定着しない原因は大きく分けて二つあり、ひとつめはセネガル初等教育が抱える授業時数の未確保といった全体的な課題、ふたつめは情操教育に対する現地教員の理解・意欲・経験不足、また教材不足などである。現地教員が情操教育を重要視しない理由には、初等教育の卒業試験で重要視されていないなどの意見も取り上げられた。総授業時数が教員のストライキなどにより大幅に不足しているため、算数や国語などの主要教科が優先的に実施されている実態が明らかになった。一方で、これまでにセネガル教育省や協力隊員が定着化を目指してきた情操教育は、フランスや日本で培われた情操教育をどのようにして実現させるかという発想が根底にあり、現地の歴史的、社会的背景に根ざした教育と呼べるものではなかったことが指摘された。

第 6 章では、本論のテーマである、セネガル初等教育における持続可能な情操教育について言及した。本論文で「初等教育」に限定したのは、セネガルにおいては初等教育が現時点において唯一、すべての子どもが受けられる教育に関する権利であると考えたためである。一方で、家庭や地域社会の中にこそ、現地に根付いた情操教育が存在するという見方もできる。そこで、セネ

ガルの社会に既存の素材を見出し、それらを学校教育と融合していくことで、ローカライズされた情操教育の可能性が広がるのではないかと導き出した。具体的には、地域に根付いている各宗教行事や習慣、市民に広く親しまれている歌や楽器、劇などが教材の中心になり得るのではないかと考えた。そのためにはまず、現地教育者が中心となって情操教育を議論することで、セネガル社会に既存の媒体ならびに素材を見出し、それらを学校教育と融合していくことが可能になる。その取り組みの順序として、(1)セネガル初等教育で課題とされる、教育の質を深めていく上で、子どもたちにどのような力を身につけさせたいのか、教育目標の明確化を図る。(2)次に、情操教育は初等教育においてどのような役割を担うことができるのか、現地教育関係者が認識を共有する。(3)そこで結論づけられた教育目標を実現するために、セネガルにある媒体をいかに利用し、学校教育の中にどうやって取り込んでいくべきかを検討する。このことにより、学校教育における情操教育の位置づけが明確になり、自国に適したカリキュラム作成など、ローカライズされた持続可能な情操教育が形成されると結論づけた。こうしてセネガルの教育者らが主体となって情操教育を議論することにより、自国のカリキュラムを築くことが一つの重要な通過点であり、そこに導くために支援者の存在は必要であると提言した。

本論文では、歴史的な文献精査を通して、セネガル初等教育の成り立ちをひも解き、現在に至るまでの課題を明らかにした。また、質問紙調査などから、セネガル初等教育ならびに情操教育を取り巻く現状と課題を明らかにした。その上で、セネガルに適した情操教育を教育現場に定着させるためにはどういった視点が必要なのか、検討したことに本研究の意義がある。